

# 私の自治の歩み その2

- 1 市職員になって組合活動に熱意を注ぐ
- 2 組織内候補が決まらず市議選に立候補
- 3 自前候補による市長選勝利が悲願、敗北覚悟の出馬（以上、前号）
- 4 疾風怒濤の市長3期10年
- 5 短期大学の看護学科設置に奔走（以上、本号）
- 6 職員が身を削ってできた新病院
- 7 革新首長の市政と妨害
- 8 五十嵐広三さんの後を受け、衆院選に立候補
- 9 ライフワークとして全国3300市町村を訪問

## 4 疾風怒濤の市長3期10年

### 議会で自衛隊OB議員に叩かれる

（社会党石橋政嗣委員長のときの非武装中立論、自衛隊の違憲合法論、その後、村山富市首相は自衛隊合憲と発言し（九四年、第一三〇回国会所信表明演説）、社会党の政策を転換しました。八六年の段階で桜庭さんはどう悩み、社会党と自衛隊がどう向き合えばいいと考えていたのでしょうか）

私が反自衛隊闘争をしているのは、自衛隊員個

人が憎い、嫌いということではなく、憲法上自衛隊の存在そのものがおかしいということです。自衛隊の代わりに、かつて社会党が唱えていた平和国土建設隊構想があり、私はこうした考えに賛成でした。当時の自衛隊員は私のように貧しい家庭だった人も多く、一つの就職先として入隊するので、隊員個人に対しては何ら恨みがありません。

それに自衛隊組織をどうするかは、一首长にはできない大きな国政の政策課題です。だから、私

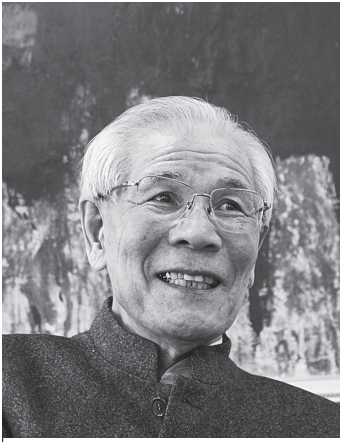
は反自衛隊の考えを変えたわけではありません。議会で自衛隊OBの議員に叩かれれば叩かれるほど、内面的に強くなりました。

でも他の人はそう見ないと思います。自衛隊のまちで反自衛隊闘争の急先鋒だった人間が市長になったのだから、自衛隊に迎合したと思われるも仕方がないことなかもしれない。

かつて社会党が打ち出した平和国土建設隊が一番いいと思っています。災害などでの自衛隊の活動を見ても、技術があり、機械器具もそろっている。近年の災害被害をみても自衛隊という組織がなかったら大変だったと思います。ですから、戦争をするための部隊ではなく、国土を守っていくための部隊がいい。

いまでも憲法上は自衛隊の存在は納得いきません。でも、いまのような自衛隊組織がまったくないと、いいのだろうか。経験したことがないので、なんとも言えません。それでは、自衛隊を認めればいいという意見もありますが、単純に容認とはなりません。

市長になってからは、自衛隊とは儀礼的な付き合いはありました。一方、自衛隊の協力会や期成会といった組織があり、代々会長は市長が務めて



桜庭康喜(さくらば やすき)

1942年北海道名寄市生まれ。1962年札幌短期大学(現札幌学院大学卒業)、63年名寄市職員、1971年名寄市議会議員(四期一五年)、1986年名寄市長(三期一〇年)、1996年北海道地域活性化センター理事長、2000年北海道国際文化交流協会代表、2008年～18年北海道地方自治研究所理事、2009年旭川大学大学院非常勤講師など。1996年、五十嵐広三さんの後継として衆議院選挙に立候補し落選(2000年衆院選落選)。主な著書に、全国青年市長会編『青年よ、故郷に帰って市長になろう』(1994年、読売新聞社)、『消えたマチ 生まれたマチ』(2010年、北海道地方自治研究所全国市区町村訪問記録編纂委員会)。

いましたが、私が市長になると会長は別の人になりました。議会ははじまつたら、「カラスの鳴かない日はあつても、自衛隊に対する私の考えを聞く質問のない日はない」というくらいでした。

### 防衛庁を表敬、あえて自衛隊増強期成会

三期市長をしている間に、自衛隊の再編や、国防計画の見なおしによる部隊縮小などがあり、各地の駐屯地所在市町は駐屯地存続期成会、駐屯地削減反対期成会等をつくり活動をしましたが、私は存続や維持ではなく、あえて駐屯地増強期成会をつくりました。それを陸上陸幕長に持って行くと、今どき増強期成会ですかと驚かれました。私は、せっかく駐屯地があるのだから、増強してもらわないと困ると言っただけです。市議会では自衛隊OB議員もこれには反対できないので、してやったりと思いましたよ。

東京へ出張したとき、空き時間が二、三時間あつたら必ず防衛庁へいきました。防衛庁は堅い役所なので、陳情は駐屯地、師団、方面本部と手順を踏まないといけないと受け付けてくれません。ところが個人に対する表敬訪問だと手続きは必要ないので。名寄駐屯地の司令は、防衛大学同期で最も早く昇進したいわゆる一選抜の人が来るので、一年半から二年いて、防衛庁の課長補佐か課長クラスで戻るエリートコースなのです。名寄駐屯地の司令を経験した人が必ず一人は勤務しているのです、その人に対する表敬訪問として防衛庁に入る。

元司令への表敬は五分ほどで終え、すぐに幕僚長のところへ行き、駐屯所在地の市長の名刺を出す、粗末には扱えないので、会うことができます。ある幕僚長は、桜庭市長の自衛隊に対する理解は分かったから、お忙しいでしょからそんなに頻繁に来なくてもいいですから、と言われるくらいしつこく訪問しました。新しい国防計画による自衛隊の再編で、北の守

りから西の守りへと転換する状況のなかで、名寄駐屯地は半減するのではないかと大きな問題になったことがあります。そのときに、増強期成会をつくって防衛庁にいき、幕僚長の上にいる当時の統幕議長(統合幕僚会議議長)を訪問した時のことを今でも鮮明に覚えています。

私がいよいよ目的は分かっています、二言、三言話すと、市長悪いけどトイレに行ってくるので、見られて困るようなものはないから、机の上や室内を眺めて待っていてくださいと、席を離れたんです。そうすると、決まるであろう計画書で、名寄駐屯地の扱いについて書かれているのが、机の上にあるのです。統幕議長は一言も触れないけど、名寄駐屯地は、ほぼ変化がないことが分かったのです。四、五分経ってから統幕議長が戻ってきて、四方山話をして計画のことには一切触れず、そう遠くない時期に発表されると思いますし、国の計画ですけど、市民が不安にならないようにしてください、という話をしてくれました。

計画で名寄の駐屯地が縮小されないことをこの目で確認し、自衛隊OBの議員が全く的外れな質問をしても、計画を見たとは言えませんが、縮小されないと分かっているの、何を言われようと気持ちに余裕があり、駐屯地の存続・維持のために頑張ると言いました。

統幕議長のはからいには今でもとても感謝しています。こうした人間関係の信頼があつて、物事は動くと思うのです。

## 自衛隊が無かりせば、まちをどうするのか

名寄は日本で一番北にある駐屯地です。防衛は北から西へシフトしたといっても、北で有事があった場合、すぐに旭川にきますから、北の砦として必要だと考えているのだと思いますよ。

また道内には駐屯地が多すぎると思います。どういう経緯でつくられたのか詳しく知りませんが、ありすぎですよ。地域の安定や活性化のために、分散して駐屯地があったほうがいいかもしれませんが、部隊の機動性は高くなっているのだから、こんなに駐屯地が必要なのかと思います。もっと集約、合理化していい。

経済界の人には評判が悪かったのですが、私が一貫して言ってきたのは、いま名寄に駐屯地があつて、そこそこの人が住んで経済活動もあり、感謝しています。ただ、絶えず念頭に置いておかなければならないのは、皆さんのおっしゃるとおり、国防政策上、駐屯地がどうなるのか分からない。私たちではどうしようもできない。もし名寄に自衛隊がなかったらどうする。そのことを絶えず考えておかなければならないと、桜庭は反自衛隊だから、そういうことを言うかと批判されました。

しかしそうではなく、もし名寄に自衛隊がなければ隣の士別市と同程度か、あるいは士別より落ち込むかもしれない。だから自衛隊があつて一定程度の人口を保ち、日常の経済活動でも感謝しているけど、永遠にこの状態がつづくと思つてはい

けない。「無かりせば、どうするのか」を絶えず考えておくことが必要では…と私は考えていると言っていました。

なぜ経済界に対してそう言ったかという点、自衛隊に依存しているからです。経済界が歯を食いしばって頑張つて、地域をよくしようというバネが生まれてこない。市長のとき、商店街で賑わいをつくるためにイベントをやつてはどうかと提案しても、いくら補助金をくれるのか、補助があるのならやつてもいいと言うのです。補助金をくれたらやつてやるといふのなら、やつていただかなくて結構となるのです。

(そうした依存体質は、自衛隊、国鉄があり、市役所というように、公的な機関や企業体があり、地域が安定していたからですか)

名寄が戦後発展してきたのは、官公庁の出先や国鉄があつたからで、地元の土建屋さんもそれほど営業努力をしなくても仕事があつた。そうした経験があり、国鉄がなくなり、三公社五現業が民間営利化されて合理化され、自衛隊がそれらに代わるものとしてある。そうではない、と経済界の人は言うかもしれないが、依存しているように思えます。

自衛隊駐屯地が存続しているのが当たり前のこととしてまちづくり、行政の政策を考えるのではなく、無ければどうするのかを常に念頭に置く。自衛隊はいらない、ということではないのですが、いまだにおまへは反自衛隊だからそんなことを言うと思われています。

## 少数の首長与党で苦勞 首長任期は3期12年が限界

(まちの行政依存的な体質の一端をしりましたが、市長になられて一週目、大変だったことは何でしょう)

市長を支えてくれるのは少数与党の議会だったので大変でした。予算案、人事案などすべて否決されるし、深夜議会も当たり前でした。でも若かったので、深夜になればこつちのもので、体力では議員に負けなかつたけど、職員は大変だつたと思います。

保守対立というよりも、私の議員時代の助役(新田さん)が、私が市長になるとその人が議員になつたわけです。職員人事のことで市長に電話をして変えさせたときの助役ですから、何度煮え湯を飲まされたかと、私のことを憎くしてしまうが、そして今度は、攻守ところを変え、私のやることは全て面白くないのですね。

私は、その人に対して何の恨み、つらみもないし、自分のやつてきたことは分かっているから、やられて当然だと思つていました。ですから、その人の議会の質問でも、感情的になつて、腹が立つたことは全くない。私が議員のときにやってきたことの意趣返しだつたと思つていますし、このきつかけを作つたのは自分自身だと自己反省していますから。助役を経験して行政に精通し、頭の切れる人ですから、保守系の議員からは一目置かれていました。元助役の議員からは、ずいぶん

やられましたけどね。

三期目は無投票になり、これで私の役割は終わったと思います。無投票の結果議会も変わり、すべての会派が首長与党みたいなカオスになり、緊張感がなくなります。私は、無投票の選挙はだめだと言いつつ続けたから、これで終わりだなと思いました。首長は三期一二年が持論ですし、責任を持って市長を務めると緊張の連続ですから、一二年が限界です。ただ、経験をしているので、手抜きをしながらボロを出さないように、四期、五期とやれるでしょうが、住民のためにも、自分のためにもなりません。一二年で交代していくのがいいと考えます。

## 市長と職員の関係

〔市職員の人事で大変なことがあったでしょうか〕  
職員の人事はあまり口出ししませんでした、苦勞した記憶はないですね。なかには、先輩より先に幹部に起用した人事がありますが、周りからも一置かれている職員なので、表面上は、人事のことで職員同士の感情的なあつれきはなかったと思います。

人事に関して基本的に係長以下の職員人事は、見るとながししか言いたくなるので見ないようにし、課長職以上は事前にヒアリングしてもらおうにしています。

組織機構は大きくは変えませんでした。職員に任せていました。ただ、面白いことがありました。

市長に就任して、最初の人事は年功序列的なたちになりました。新しく任命した部長本人が市長室に来て、「私はあなたに投票しませんでした。それでもいいんですか」と言われて驚きました。名寄市の幹部職員で私に投票した人はほとんどいないのですから、それで構わないと言いましたよ。

それから私は、さみしがり屋だから、二時間と一人で市長室にいられないのです。だから、急ぎの用事がないときは職場を回って歩き、組合活動を一緒にやった職員が話しやすいのでそこへ行く、大体係長クラスになっています。

あるとき、係長会議で申し入れがありました。自分たちのところに来るときは、どんな案件で来たのか、部長や課長に伝えてほしい。そうでなかったら、市長が戻った後に、何の用事できたのか、根掘り葉掘り聞かれてしまうが、いなど。そんなことがありましたが、役所組織ではそうなのでしょうね。

もう一つは、笑い話みたいなことですが、総務部長が真面目な顔をして来て、市長に注意してもらいたいことがあると言います。何だと聞いたら、トイレで職員に話しかけないでくれということです。職員と並んで用を足しているときに、私があつてどうなつたと職員に聞くと、小便が途中で止まってしまうということです。言われてみればそうかもしれませんね。

〔職員の働き方などで意識改革の必要性を感じたり、おやりになったことはありますか〕

職員の意識改革は必要だと絶えず感じていました。私は四年に一度、選挙を通して市民の評価にさ

らされます。市長として職員に約束できることは、職員の皆さんが仕事上よかれと思つてやつたことで責任を問われることがあつても、それは市長の私が責任を負う。だから思いつきりやつてほしい。ただし、かつばらい、万引き、交通事故はその限りではないとね。これが一つです。

二つめは、まちを動かしていくためには、大きい小さいは別として、絶えず新しいこと、課題を求めていくことが必要なので、いろいろなアイデアを出して政策化して、行動してください。そして金をどうするか、どう財源をつくるかも考えてほしい。それは、単に道や国の金を当てにするのではなく、例えば笹川財団などの援助団体の民間資金を採す。金は財政課頼りでは本当に自分たちがやりたいことではないだろう。どうしても実現したいことであれば、自分たちで財源も探してほしい。

これは議員時代の地域活動で、私の住む町内会は笹川財団から表彰されたことがあるし、助成を受けているいろいろな活動に使つたことがあり、そのような経験から、様々な団体の活動援助資金に目配りしてほしい。援助金は五万円、一〇万円かもしれないけど、数が集まればそれなりの額になります。だから、金は財政課まかせということだけはやめてほしい、という話をたえずしていました。

三つめに、私はどんなに忙しくても職員の起案決裁文書は丁寧に目を通し、解らないところには付箋を貼つて戻し起案者から直接説明を求めました。このことが職員との信頼関係を強くした一つ



の要因になったのでは…とっています。

職員は冷静に市長の本気度と実行姿勢を見てい  
ると思います。職員は市長が本気であると納得す  
ると万難を排して頑張ってくれることを実感しま  
した。

## 保健センター開設し健康づくり ヘルシーコンペ・チャレンジデーをはじめ

（市長になって一期目の保健センター開設は、  
前市長からの引継ぎなのか、それとも校庭さんにな  
ってからの独自事業ですか）

市立病院職員の経験からまちづくりのベースは  
市民の健康だと思っていたので、健康予防活動に  
力を入れるために選挙公約の一つであったセンター  
をつくりました。加えて健康まつりをはじめ、健  
康バッジをつくりました。一〇周年のときにこの  
バッジを持っている人を表彰しますと言いました  
が、一〇年経つ前に辞めてしまったので、誰もそ  
のことを覚えていない。当時の部長と課長は引き  
継がないで退職したので、果たせないままになっ  
ています。いまでもそのバッジをもっています。

健康まつりの目玉として、ヘルシーコンペとい  
うのをやりました。カナダでチャレンジデーとい  
うのをやっていて、保険会社がスポンサーとなっ  
て、カナダ全土の市町村に参加を求めて、定めら  
れた日時に住民が健康づくりの活動に参加した参  
加率を競う健康づくりイベントです。そうした活  
動をしていると、姉妹都市のリンゼイ市（合併で

カワーサレイクス市に）に市長として公式訪問し  
たときに知りました。同じ日に姉妹都市のヘル  
シーコンペとして、リンゼイ市民と名寄市民の参  
加率を競うイベントを行う約束をして帰国しまし  
た。保健センターをつくって健康まつりをやるど  
きに、それをメインの事業にして実施しました。

カナダでは保険会社がスポンサーをやめると、全  
自治体でチャレンジデーをやめてしまいました。が、  
やめる直前、笹川スポーツ財団が気軽に国民が参加  
できる催しがないかと調べてチャレンジデーを知  
り、そして名寄市がカナダ・リンゼイ市とヘルシー  
コンペの交流をしていることが分かり、財団の事務  
局長から私に話を聞きたいと電話がありました。

三、四年前から、ヘルシーコンペをやっていると  
説明すると、これを笹川スポーツ財団で普及させたい  
と言われました。それほどお金はかかりませんが、  
年に一回、日時を決めて、参加する自治体を募り、  
住民の参加率を競うイベントとして始めました。

当時三三〇〇市町村のなかで、四、五つの自治  
体に参加してはじまり、現在四〇〇〇くらいの自治  
体に参加していると思います。名寄市もつづけて  
います。人口がおなじくらいで北と南に遠く離れ  
た全国二つの市町村を対戦相手として定め、A市  
とB市が、午前六時から午後六時までの一二時間  
の間で、個人や団体が五分以上、何でもいいか  
ら体を動かしたり、スポーツを行い、それを事務  
局に申告してカウントし、参加率を競う。負けた  
自治体は勝った自治体の市町村旗を一週間掲揚塔  
に掲げることがいままやっています。国内で最初

にはじめたのは名寄市です。

このほかに名寄市訪問看護ステーションをはじ  
め、当時は道内でも先駆的な取り組みだったと思  
います。

## 名寄の快適な冬の生活

一九八九年の「名寄の冬を楽しく暮らす条例」  
は、この時代は宣言条例が限界でしたが、私自身  
の強い思い入れがあるんです。三期途中で市長  
を退任したので、思い描いたことが出来なかつた  
ので心残りです。

名寄は道内のなかでもとくに積雪寒冷の地で、名  
寄が住みやすいまちになるためには、冬季にどう楽  
しく快適に暮らせるかが、絶対条件になるわけです。  
ですから私は単なる宣言や理念にとどまらず、条例  
を改正して、たとえば冬の除排雪対策では、歳出総  
額の何パーセントとか除雪率など具体的な数値を盛  
り込む。寒冷地用の住宅補助の基準などを順次定め  
ていく、この条例があるから名寄の冬は快適に過ご  
せるという内容にしていこう構想だったのです。

それと、北海道の新長期総合計画戦略プロジェ  
クトの「利雪・親雪モデル都市」に唯一指定され  
たことも、条例制定のきっかけになりました。

（この条例は名寄の快適な冬を見据えた第一歩  
であったと）

当時は、この段階までが精一杯で、いずれは名  
寄のまちにあった基準を設定するなど、独自の条  
例をつくるのが可能になると思っていたので

す。この条例が名寄の快適な冬の暮らしを担えるようにしたかったのですが、実現できなかったので残念に思っています。

条例を制定するとき、保守系の議員からは、こんな条例をつくって腹の足しになるのか。大上段に条例だと構えて、市長の点数稼ぎだ、とずいぶん批判されました。

市独自に融雪溝をつくりましたが、除排雪は従来からの単純なやり方が合理的だし、安上がりです。融雪溝や流雪溝は、導入当初は、便利だと思っ

### サハリン・ドーリンスク市との友好都市

（健康づくり、冬の生活に光を当てるソフト事業は市長の発意なのか、それとも職員のなかから出てきたのでしょうか）

生意気なようですが私の思い入れの事業で、議員のときから考えていたことで、そういう主張もしていました。

それと新たに国際交流事業も始めました。

北海道日ソ親善協会（現北海道日本ロシア親善協会）役員で道議会議員だった鈴木泰行さんから

ら、サハリン州ドーリンスク市が道内自治体との姉妹都市を希望しており、名寄はどうだろうか？と連絡があったんです。

ドーリンスクは樺太時代の旧落合で、調べてみると、そこには王子製紙と合併した富士製紙の工場があったところなんです。戦後、樺太落合から引き上げた製紙工場の職員全員を、道内の王子製紙工場で引き受けることができないため、多くの職員を山林部に職種転換しました。

戦後、名寄には王子製紙山林部の出張所がつくられ、落合の製紙工場にいた職員十数人が名寄市で勤務していたことが分かったのです。それから名寄市の保健婦さんで、落合で生まれ育った人がいて、名寄市と何らかの関係があることが分かってきました。

その後、樺太時代の関係者の墓参りや故郷を訪問する「サハリン平和の船」でドーリンスクを訪問する機会があり、名寄の日ソ親善協会会員の斉藤一郎さんにドーリンスク市長宛の親書を託しました。日ソ親善協会から友好都市締結の打診があり、旧落合出身の人も名寄に住んでいるので、話をすすめたいと考えているので、機会があったら名寄を訪問して見て頂きたい、と伝えました。

後日、ドーリンスク市長と市議会議長、何人かの市職員が名寄を訪れ、姉妹都市を締結することに合意しました。

しかし、これも市議会の多数は断固反対でした。かつての敵国ソ連、しかも日本人が追われた樺太のまちと、何が悲しくて姉妹締結をしなければなら

いかと。結局折り合いをつけたのは、姉妹都市ではありません、友好都市ということで落ち着きました。そのときから二〇二一年で三〇周年になり、道

内のなかでもこのように相互交流をつづけているのは少ないと思います。大体は行政主導で交流し、熱心な職員がいれば活発になるけど、そうでない職員だと交流が止まってしまったり、市長が代わって止まることもあります。名寄の場合は、市民の団体が熱心に活動し、地道に交流をつづけています。私はいまドーリンスク市の名誉市民になつていて、二〇二〇年は名寄市がドーリンスク市を訪問する年なので、八〇歳を目前にして元気づけよううちに最後の訪問と考えています。

飛行機で新千歳空港からユジノサハリンスクまで行くと、ドーリンスク市のバスが迎えにきてくれます。残念ながら、稚内港とサハリン・コルサコフ港との定期航路は休止になりましたが、北海道が主体となつてサハリンとの航路を維持すべきです。稚内市に押しつけるようなかたはいいけません。

将来を見据え、北極圏航路までも視野にいった、道独自のビジョンがなければならぬ。国の顔色を伺って行動しているのではダメですね。

### ソフト事業の大切さ

将来の地域の人口減等を考え、老朽化した火葬場の移転新設事業を名寄市、下川町、風連町の共同施設として建設をしたいと両町に提案し協議をしましたが下川町が不参加を表明したため名寄市

が建設し、風連町が利用する方式をとり、名称を名風聖苑としました。

建設地を含めた四つの町内会から迷惑施設建設反対の運動が起き大変苦勞したことが思い起こされます。最後の説明会で、ミニコンサートなどが出来る明るい施設にすることを約束しました。

名風聖苑供用開始の年から約東通り鎮魂コンサートを一〇年間行いました。お盆時期で火葬場の利用がない友引の日に、墓参りに来ている人と呼ばかけて、エントランスホールでコンサートを行いました。この事業も私の市長退任を契機に終了してしまい残念に思っています。

いまは笹川財団が行っている「チャレンジャー」は国内では名寄が最初だったし、快適な冬の生活の条例も当時としては画期的だった。住民と連帯してソフト事業をやるのは行政にとって大切なことだと思えます。

名寄市の母村といわれる山形県藤島町（合併により鶴岡市）と姉妹都市盟約を結び、隔年で互いに訪問し、住民交流と物産交流をつづけています。一九〇〇（明治三三）年、藤島町からきた一三戸の開拓団農家が入植したのが、名寄の開基としています。

名寄市史にはいつ開拓の鋤が入ったなどと記録されており、藤島町を母村と位置付けているのに、名寄市（町）で実施してきた周年事業等の連絡や招待などの交流は全く行われていないことを知り、私が市長として初めて開拓九〇周年記念式の招待状を藤島町に送付しました。東京出張の帰

路藤島町を訪問したところ、町長をはじめ議会議員、出身地区長などの多くの方の歓待を受け、藤島町としても開拓時代にこの様な歴史があったことは知らなかったと驚き、急速に様々な交流が始まり、一九九六年（平成八年）、藤島町（現鶴岡市）

## 5 短期大学の看護学科設置に奔走

### 大学に看護学科をつくるため必死に 文部省と交渉

（前回からのつづきで、短期大学を存続させ、地域に定着させるご苦労からお願います）

前回もお話しましたが、私の同級生が名寄女子短期大学の一期生です。男女共学だったら、私も入学していたという思いがありました。議員になって、自分なりに一つの大きな活動のテーマは、短大を名寄に残すことでした。

当時の助役以下、財政を担当する職員、保守系の議員は、大学は市長の趣味でやっている、お荷物だから、一日も早く大学をなくそうという意見が圧倒的に多かった。そんな中私は、短大は存続させるべきだと議会でも主張してきました。

市長になって、自分のできる範囲でいい大学づくりをしたいという思いで取り組んできました。

一つは、名寄女子短期大学を市立名寄短期大学に名称変更して男女共学にし、家政科を生活科学科としました（一九九〇年）。

と姉妹都市の締結をしました。

こうしたソフト事業は大切です。新規にハード事業を行うのではなく、維持補修を重点に、終の棲家として地域で暮らしつづけられることが必要です。

元々大学をつくる発想は、不足していた看護師、保健師、栄養士を自前で養成したいという池田市長の最適な理想の実現でした。しかし財政的な問題もあつて、看護師、保健師を養成する理系の大学は無理なので、市長に短期大学という名を取らせ、事務方は家政科という実をとることになったのです。

そういう経過があるので、私は開学理念の原点に戻って、なんとか看護学科をつくるために奔走しました。

文部省と随分やりとりをしましたが、最終的には三年制の短大で看護学科をつくることになったのです（一九九四年看護学科開設）。当時の文部省と厚生省がよく認めてくれたと思います。全国公立短期大学協会の事務局長は、文部省の課長クラスが天下るポストで、当時の事務局長から「核庭市長、どういう手品を使ったのですか」と言われました。短大に看護学科を設ける取り組みをはじめからわずか二年で設置審（大学設置・学校法人審議会）の許可を得、設置にこぎ着けるのは、文部省で役人をしてきて初めての経験です。どん

な手品を使ったのですか、と驚かれるほど早く決まった。

私としてはとにかく必死だったので、異例のこととは思わなかった。ただ幸運な面もあり、文部省高等教育課長は理解のある人でした。

看護学科の設置の可能性がみえないなか、先に校舎を建築しました。認可決定前なので、起債をせずに、基金を取り崩して校舎を建てました。認められなかったら、市長を辞める覚悟で、起工式のときから上着の内ポケットに辞表をいれていました。そのくらの決意と覚悟で臨んでいました。議会はお手並み拝見という感じで、失敗して桜庭の首を取るという考えだったと思います。

当時の短大の大沢事務局長は、高校の同級生なのでよく知っている間柄で、学科の新設が認められなかったら事務局長に力がないからで、そのときは辞めると言ったのですが、職員が責任をとることはなく政治家の自分が責任をとるから、とにかくすすもうと取り組み、三年制の看護学科ができたのです。

### 看護学科設置と設置審

(看護学科を設置するときは、厚生省と文部省の間でよく採めるようですが)

一番の大きな壁は大学設置審議会です。

看護学科設置の申請当時の文部省高等教育課長は、後に拓殖大学北海道短期大学(深川市)の学長になった深川市出身の方でした。

私は午前九時に高等教育課長の机の前に行き、とにかくあなたが設置に「ウン」と言ってくれなかったら、市民に顔向けできない。名寄に帰れないから、ウンというまで机の前から動かないと言いつつ、「ウン」と言ってくれと粘りました。課長は設置審がどうだこうだと言うので、吹けば飛ぶような名寄の田舎の小さな大学のこと、設置審で大騒ぎするほどでもないのだから、何とかならないのか、と課長の前から動きませんでした。課長は困り果てて、「審議案件の最後」に入れるよう担当係長に指示をしてくれました。幾度も手続きを経てきましたが、最終的にはそういう一押し場面がありました。

看護学科は四年制大学でしか認められておらず、それまで短大で三年制の看護学科はなかった。大学なので、専門課程に加え一般教養などの勉強もあり、カリキュラムは相当きつく、短大時代に看護学科を卒業した学生は大変だった。その後、四年制大学になったので、少しは余裕ができたと思います。

### 新設の学科長を頼む先生と巡り合うドラマ

(学長や学部長、先生を集めるのは大変だったと思います)

学科の新設にあたって、先生を集めるのに苦労しました。

看護学科で教えることのできるライセンスを持つている人は道内に少なく、いても札幌に集中

している。そして、信頼できる人が学科長でないと、教員を集めることができませんが、これにはドラマがありました。

短大に看護学科を設置する一年くらい前、市立病院で点滴に異物が混入する事故がありました。准看護婦養成所を卒業する直前の三月、生徒が市立病院に実習生として来ていました。当時の病棟は一人夜勤なので看護婦は忙しく駆け回っていて、どこでどう間違ったのか、実習生が点滴のなかに異物を入れて、患者が亡くなってしまったのです。

亡くなった患者は、私の父親と同業の桶職人で古くから親交があり、同級生の息子もいて、かねてから付き合いがあったAさんという方でした。実はAさんが、住民懇談会が終わったときに、「市長にちよつと頼みがある」と言うのです。その方の長男が小学校の先生をしていて、あと三、四年で定年になるので、名寄に戻りたいのだけれど何とかならないだろうか、という相談でした。

調べると上川管内のJ.R富良野線沿線の学校で教頭をやっていることがわかりました。教育長に相談すると、ちよつどうまい具合に小規模校の中名寄小学校の校長が退職するのでその後任者として来てもらうことになりました。いま、「はだしの学校」として有名です。Aさんに大体うまくいきそうだから、息子さん、名寄に来られるよと話す喜んでいました。

Aさんが亡くなり、名寄に戻ってきた長男が葬儀の喪主を務めました。警察は事件にしたいので、



遺族に告訴することを勧めましたが長男は、親父はもう年だし、悪意ではなく、間違っつてこういう結果になったのだから、これが親父の運命だし、寿命だと思ふからと告訴はしなかったのです。

この事故があつて二、三カ月後くらいに、北海道看護協会の役員三名が訪ねてきて、市長室で応対しました。そのときの要望は、ミスを犯した准看護師は悪いけど、研修中に誰のサポートもなく一人で仕事をさせていた病院の管理体制にも問題があるのだから、准看護師一人の責任にしないでほしい、という申し入れでした。

私は市立病院で勤務した経験があるし、妻は看護師なので、仕事の大変さは十分理解していましたが。協会役員の方に、言わんとすることはよく分かります。決して看護師一人の責任とは考えていません。設置者である市長としての責任、病院長や体制の問題も含め瑕疵があつたのだから、心配しないでくださいというような話をしました。

北海道の看護師のリーダー的な存在で、道内には教え子がたくさんいる北海道大学医療技術短期大学の吉田京子先生を説得し協力が頂ければ、何とか名寄の看護学科に先生を集められるのではとの情報を得て、藁をもつかむ思いで北大の吉田先生を訪ねる恐る挨拶をして名刺を渡すと、開口一番、私は市長に合うのは二回目だと言われました。正直いつてお会いしていた記憶がなかったので、いつ会つたのかを聞いたところ、点滴異物混入事件について北海道看護協会として申し入れに市長室に来訪した三名の一人が吉田先生だつた

とのこと、改めて人と人の縁を大切にしなければと実感しました。

吉田先生は、長い看護師生活でいろいろな人に会つたけど、桜庭さんほど看護師に対して理解があり、地域医療と病院に情熱を持って話してくれた人は初めてだ、と好印象をもつてくれたのです。それで、市長の依頼であれば、できる限りのお手伝いをしますと、看護学科の学科長を引き受けてくれたのです。それから、トントン拍子に教員が集まり、体制が整っていきました。

看護学科の教員に医者が必要ですが、とにかくお金がないので、学長になる人が医師資格を持っていけば一石二鳥になります。誰か適任者がいないかと探していると、北大に臨床病理学が専門の牧野幹男先生がいました。後で知つたのですが、牧野先生は旭川大学学長（二〇二一・四から理事長）の山内亮史先生の伯父で、大学へは牧野先生の家から通つていらつたので、医師の条件を満たす学長になつてもらつたので、医師の条件を満たすことができましたし、吉田先生に学科長になつてもらい教員募集は順調にいきました。

生活科学科は若干定員割れをしたことがありましたが、看護学科は定員五〇名に対し常に三倍以上の応募がありました。市民からは、名寄市立の短大にもかわからず、市内の高校生の入学が少なくと不満が出てきました。このため、三名の地元地域枠をつくり、少なくとも三名の地元でしたが、応募が多いのは喜ばしいことです。

## 教授会に乗り込んだ乱暴な大学設置者

看護学科設置前に話は戻りますが、私は非常に乱暴な大学設置者でした。これは許されることではないのですが、短大の教授会に乗り込んでいつて、設置者の言うことを聞いてくれなかつたら大学を潰すまで言いました。

（大学自治の面から考えると、問題のある発言でしたね）

組合運動をしてきたので、大学自治の重要性は理解している。しかし現実をしっかりと見てもらわないと、そうでなくても大学を潰せ、金食い虫だという声が圧倒的に多いわけです。もし大学を潰して、先生たちが一般行政職に甘んじるのであれば、責任もつて市の職員にします。しかし、研究者としてのプライドがあるでしょうから、そういうわけにいかないでしょう。ですから皆さんの研究業績をアピールして移るところを探しておいてください、とずいぶん生意気なことを言いました。大学の教員組合から抗議を受け、団体交渉をしたこともありました。

大学の自治を承知していながらも、吹けば飛ぶような地方の公立短大が大きな公立大学や、国立大学と同じ条件でやれという方が無理で、それでは大学を維持できない。現実を認識してもらわなければならぬ。大学の自治を侵す気持ちは毛頭ありません。しかし、大学がなくなつていいのか、と乱暴なことを言いました。

（市長が乗り込んで言わなければならぬ、重

大な局面があったのでしょうか)

こういうことがありました。教員の採用は教授会で決まります。設置者の私には決裁文書で、何日の教授会で誰を教員として採用することが決まったので、市長に押印してほしいとくる。

これに対して、おかしいのではないか、私は設置者ですよ。大学の自治として、教授会での決定を否定するものではない。ただ、少なくとも、書面で決裁文書を出す前に、大学を代表する学長から、設置者に対して、こういう業績のある先生を、学生のために地域のために迎えたい、と一言あつてしかるべきではないのか。そうしないと、設置者の役割とは何なのかということですよ。ですから、一カ月程決済をしなかつたこともありました。そんなことなど、あまり褒められることはありませんが、ずいぶん議論を交わしました。

これまでの設置者も悪かつたと思いますよ。大学ができてしまった後はお任せとなる。大学の側は大学の自治があるし、教育公務員特例法(「特法」)もあるのだから、外から大学に口だしできるものではないとなり、お互いに疎遠になった。あくまでも形式的な手順だけで考えていたと思うのです。名寄のように小さな大学では、それでは持たないと思います。

これは大学に対する文句でなく、大学に対する自分の夢、思いがあるので、ほかの設置者とは違つたかたちになり、生意気で乱暴なことを言ったなあといまは反省しています。

看護学科ができてから、教授会に乗り込むこと

はしませんでした。

### 残された大学の課題

(自治体が大学をつくることは、地域のまちづくりのなかでの大学の使命があるわけですから、両者が建設的なかたちで価値観、目的を共有していくことですね。大学教員の市審議会への寄与、市政との連携を意識したことは)

大学の教員は、徐々に各種審議会の委員になつてもらいましたが、まだまだ活躍の仕方が少ないと思います。もつと積極的に大学の先生方に手を貸してもらふ必要があると思います。

私のあとに市長になつた島多慶志さん(一九九六年〜二〇一〇年まで在任)は、財政課長時代、短大の存続には市の財政を考え慎重論者でしたが、市長になると、短大を四年制大学にしたいんです。市長になつていろいろ政治のことに関わるようになり、改めて大学の意義と必要性を感じたのだと思いますよ。

四年制になつたのはよかつたのですが、いまでも残された課題があると思つています。大学は従来のまま名寄市立大学という公立ですが、国公立大学のほとんどは独立行政法人になりました。

名寄のような小さな大学で、市民が爪に火をともしようにして歴史を刻んできた大学であるが故に、市民が参加をする独立行政法人で大学運営をしないと、名寄に大学を置く意義を先生方は理解してくれない。市民と行政と大学の教職員が、三

位一体となつて運営して育てていかないと、大学は維持できないと思うのです。

でも、大学の側にとつてはいやなことかもしれない。介入されるような気がする。だから、独立行政法人は大学にはメリットがないと言ひ、大学事務局は先生方の意見を踏まえて、設置者の市長に進言するから、設置者は真剣に考えないので、依然として公立大のままつづいてる。

しかし、公立大学のままでいつまで持つのだからかと思つているのです。四年制大学にするときが節目だつたと思うのですが。

大学の運営は順調にきていますが、今後の課題としては私立の旭川大学が市立化(公立化)されたときの影響です。旭川大学にも看護学科があり身近なライバルになりますね。ただ、看護師国家試験の合格率は、名寄市立大学と旭川大学とはかなり差があり、名寄の合格率は九九・九%です。看護学科ができてからは、交付税は増額になり、財政的に少しよくなりました。いまのところは順調だと思ひます。

(次号につづく)

本稿は、二〇二〇年一月二三日と三月二七日に行つたインタビューをまとめたものです。聞き手は、山崎幹根・北海道大学教授(当研究所副理事長)と当研究所編集部。